

スクールカウンセラーと教育委員会、地域住民、 相談所、関係機関の「連携の観点」についての研究

中 田 つかを

“A Study on How-To-Coopererate for Solving Problems among People in the Local Communities, School Counsellors, Education Commissiners, and other Organizations concerned”

Tsukao NAKATA

As a school counselors, working with local people,clinics,hospitals, other kinds of centers such as counselors' centers,and other related bodies such as the juvenile department of the police,we should have the people in charge of these organizations band together and cooperate with the Board of Education.

If school counselors play a part in connecting “horizontally” many organizations devided ‘vertically’ into divisions, parents and childrens, teachers and school counselors will be able to deal properly with many kinds of problems.

At present neither parents nor children have enough information, and consequently can not deal with problems they have.

The counselors should become a sort of an interpreter for those people,children,parents, and teachers expect enthusiastic cooperations,and support from experts and the local people.

The school counselors also have serious poblems and can not properly assist children,parents,or teachers without support from other experts. We need more support from those who can deeply understand what we are dealing with in other to accomplish our purpose.

I would like to list some of my ideas about the role of school counselors;

1. To popularize ways of educating children and garndchildren together as a group of people.
2. To consider ‘barrier-free’
3. To form an alliance to protect abandaned children.
4. To change our town or cities into more comfortable place for children and grandchildren to live.

5. To visit more than five public and private counseling centers.
6. To find volunteers to help children who have problems.
7. to take care of local abandoned children.
8. To have tripartite discussion with school counselors and representatives of schools and the Board of Education of cities ,towns and villages.
9. To think about foster homes as a shelter for children.
10. To sort out a way of raising children and grandchildren with assistance of older generations.
11. To do local public relations work.
12. To realize children's mental and physical health in cooperation with counseling centers and other organizations concerned.
13. To provide children with the best consulting services.
14. To strengthen the cooperation of four parties ; representatives of schools,the Board of Education of cities,towns,villages and the prefectural government, and school counselors.
15. To cooperate with municipal colleges and universities.
16. To tie up with colleges and universities in order to compensate for the low population of college students in rural areas.
17. To hold at least three seasonal meetings (spring,autumn and winter)on a prefectural or current basis in order to obtain a quick understanding of the situation.

要 約

学校に外部の人が入る「スクールカウンセラーの役割」として、地域住民、各種の相談所、各関係機関と連携する場合に、教育委員会とともに関係する人々が「結束する方向」にむくよう気を配ることが重要です。

そのことは、「スクールカウンセラー」が多くの組織を「横につなぐ役割」をすることになります。そうなれば、親と子供、教師とスクールカウンセラーが、お互いに「適切な情報の処理」ができるからです。

現在は親も子供も「情報」が少なく「処理が適切にできない」ため困惑している状態にあります。「情報と情報の間」で「ある種の通訳」をすることをスクールカウンセラーに求められています。子供や親は、教師、専門家や地域の人の「光と熱を持った協力と支援」を求めているのが実情です。

スクールカウンセラーは、学校や家庭、地域の中で深刻な現実と直面しており、他の専門家たちの協力と支援なしには、子供と親たち、教師の支援を適切にできないでいます。住民や相

談所、関係機関の人々の「バリアー」をこえた「地球市民」としての協力と支援が重要になります。

次にスクールカウンセラーが持つべき主な観点を列記します。

1. 「子育て、孫育て、親育て」の基本ノウハウを地域の人々で普及する観点
2. 「バリアーフリー」という観点
3. 「住民の子育て同盟」をもつ観点
4. “かけこみ寺”という「子供の居場所」を多くもてる「村や町」にする観点
5. 「公的私的な相談所を5つ以上尋ねてに出向く」観点
6. 「ボランティア」を公募する観点
7. 「地域の子、孫は地域で育てる」観点
8. 「三者（学校代表、市町村教育委員会代表、スクールカウンセラー）協議」の観点
9. 「子供を守る家」・「安心の家」を協議する場の観点
10. 「三世代の子育て、孫育て方式」が町や村に根付く観点
11. 「地域広報の活用」の観点
12. 「子供の心身の健康は、各相談所・各機関の協力で始めて達成できる」という観点
13. 「親と子供に一番いい相談所、関係機関を提供する」観点
14. 「四者（学校代表、教育委員会代表、県教委関係者とS・C）の連携と広域の人材協力を強化する」観点
15. 「県内の大学がある都市部の連携」を得る観点
16. 「村などの地域では大学生も少ないので、大学の協力を得る」観点
17. 「状況把握を迅速にするために県単位かその次の単位の広域の関係者の会合が年間3回（春、秋、冬）は必要という観点

1. スクールカウンセラー（以下S・Cという）が、地域生活環境の中に「新たな心理的な絆」を構築する観点について

1-1. S・Cが、地域の住民、教育委員会、公的なまた私的な民間のクリニック医師、カウンセラー、病院、児童相談所などの「相談所」、それに警察などの「関係機関」との絆を強める観点

1-1-1. 子育て孫育ての「基本ノウハウを地域の人々で普及する」観点

一部の地域を除いて多くの地域では、「子育て・孫育て」が、かつてないほどにむつかしくなっています。それは誰も経験したことがない経済構造、情報社会の出現により生活環境が激変し、人類の課題が凝縮しつつあるからです。このために、親はどう対応したらいいのか祖父母はどうすべきか、子育てでほとんどわかっていない「未知との遭遇」との出会いで困難を抱えてきたからです。

この現象は、前代未聞な現象であり地球的な規模であり、課題が大きくほぼ同時的な現象

になっています。「環境の問題」、「介護の問題」、「福祉の問題」、「人権の問題」とも連動していて、地球的に処理する課題となってきたからです。この課題にうまく乗れない親子、祖父母が増えています。

昔は、「子供は親の背中を見て育つ」といっておりましたが、現在は「親の働く姿」や「研究する姿」は多くの企業などの中に隔離・閉鎖されていて、子供が「働く親」を直接見たり話す機会を奪われています。

明治以来、こうして子供と親との「隔離」が世代を通して拡大しており、その度に隔離隔絶は拡大され、その結果として、親子の亀裂が深くなり「親子の断絶、世代の断絶」が思いのほか大きくなりました。

この歴史的な展開で「子育て孫育ち」は危機的な状況に至っています。その弊害が20世紀末の現在激しく吹き出しています。

「人間の尊厳」、「父性と母性の欠落や崩壊」は進行しています。非情な速度で進んでいるのです。

現在、父母が親として「責任と愛情」を十分に持って、「楽しく子供を養育する時間」をほとんど持てない環境に置かれております。子供にとっては、有史以来の最悪の環境なり、最低の条件のもとで生活を余儀なくされています。表面的には、物質は豊かですが魂は厳しく固くて、心の中が空白な状態にあります。虐待に近い子供が実に多くいます。地域の支えも希薄になりました。

「突き放している」父親は「子供を鍛えている」といっているが、鍛えているようで実は、逃げていたり、子供を放置したり、攻撃しています。

父性がゆがんでいたり、かけている人がいます。母性も「かわいがり育む」ことを知らないでつつい子供を痛めつけています。習慣的に無意識的に父母が繰り返しています。

「育む」ことをしない母親が大勢目に入ります。この現象は、明治以来の産業革命の結果であり、学校教師の中にも、人を「かわいがる」ことを子供のころに体験していない「人間の価値」を深くは知らない、望ましい養育を知らない教師も偏差値教育で生れて増えています。

こうして「子供のころ」は、どこへいっても満たされていない状況に落ちこんでいます。現在も年々この状況が拡大再生産されて続いています。黒い雲が子供の上に広がり子供の不安が走り、その結果は自己統制が働かない行動をする子供が増えてきました。

もちろん、これは「親の姿の反映」ですし、家族の弱さの反映ですが、大人を取り巻く職場や地域の分裂した状況、細くて弱くて「人間性が少ない社会構造」の姿を、子供が忠実に「写している」結果とも言えるのです。

「子供は、社会を写す鏡」になっているのです。子供を責める前に、私たちは大人の怠慢と無理解を反省すべきです。

したがって、子育て孫育ての「ノウハウを地域で広める課題」は緊急なものになりました。

「半人前の大人」として見ることをやめて、「一人前の子供」としてみても、所属感をからだで感じる場面を地域で活躍する場面を提供することが、大きなテーマです。

1-1-2. 「バリアフリー」という観点

家庭も地域も学校も、相談所、クリニック、医師、病院、カウンセラー、児童相談所などの関係者、警察などの関係機関も、「バリアフリー」という観点で「調和ある結束の方向」で支援し合うことが必要です。

子供の成長課題がこれまでになく多くなり、さらにこの異常潮流を放置すれば、社会的な損失と損害は甚大なものになります。「社会的な貢献」を無視した「自己利益中心的な企業」がその悪の推進者です。

20世紀の最後の今、地域の平安は壊され、子供の暴走や愚考が増加しています。これも20数年前、子供だった人が十分な環境での「人間成長」をしないままに、大人となり、あの時の「悪い影響」が大きくなって子どもの前に吹き出しています。

その結果は「地域の平和」は、暦年にわたる親子の断絶で「親と子どもの双方」から否定的に吹き出しており、「ある種の騒乱状態」にまで悪くなった「地域」が多く出ています。

したがって私たちは「子育て孫育ち、親育ちの相互支援から」を合言葉にみんなで行動を起こす必要に迫られています。戦前は、家族の回りに「世間」の目がありましたが、人の移動が激しくなり、「となりは何をする人ぞ」となって、世間が衰弱し消滅しました。

古い形の「バリアフリー」が昔はあったのです。支援と監視が強かったのです。

しかし現在は、別の新しい意味「環境問題、高齢者の介護問題」で、新しい「共同社会」が生まれつつあります。家の中の障害をなくすことから始まり、いまやすべての人にどこでもいつでも、特に子育てには「地域の障害」は良くありません。「心の中のバリアー」は良くないのです。

世界的な市場経済と情報の共有社会の出現が、「生活と運命の共同化」を、促進しています。このために、「バリアフリーという観点」がどこにも急速に拡大され強化されています。いよいよ「地球は1つの船」、「地球は小さな村」になってきたのです。「バリアフリー」は、ベルリンの壁の崩壊を合図としてあらゆる分野で始まり、新しい交流と支援の親密さを作り出しています。阪神淡路大震災はその日本での始まりです。

「バリアフリーという観点」が「新しい世間」を作るでしょう。公害やゴミ問題、介護、人権などで広がっています。家族、地域、学校、病院、施設、機関と相互にバリアーが小さくなってゆくことが、私たち人類の課題の解決には不可欠になりました。

1-2. 学校の存在は、「地域社会と連動し栄枯盛衰をする」という観点。

1-2-1. 「地域の教育の力の象徴が学校の姿」に出るという観点

学校は、歴史の中では地域からは独立せず、地域の住民の力に左右されます。今「学校教

育」の「主体性」の再確立が必要です。学校が地域の課題と人類の課題に目を向けて活動するという、ありふれたしかし、重要な課題を学習するという主体性をもつことです。そのため「地域の学校への主体性」を再構築する時を迎えています。

この課題のためには、「住民の協力」「総代・自治会長，区長」「教育委員会」「各種の相談所関係機関」がどのように「結合」しているかが問われます。

学校は、もともと「住民の意志と力に依存して存在」を続けていますから、地域と学校の結合が弱いと学校は衰弱します。「学校の機能不全」が始まります。これは「地域と家庭とのバリアー」が高いことを示しており、連携や支援関係が少ないことを示します。

家庭の崩壊，父母の崩壊，学校の崩壊，授業の崩壊，教師の崩壊，地域の崩壊，住民の分裂，これは特に「学校と住民との隔離」をうみました。その結果は「バリアー」を高く大きくしたのです。この障害，この分裂がなくなれば，地域の教育の力はもっと生きてきます。

豊かな人間性は，「地域の中で育つ」といえます。「子育てと学校」は人類の大きな「責任と義務」であり，避けては通れない運命になってきました。それほど地球は小さくなり，人類が出す害は市場経済の「第3産業革命」で急速に悪くなっています。意識的な対応が重要になりました。ことなかれではすまない情勢にあります。学校を見れば「住民の意思」がでています。「住民の意識の覚醒」がいそがれます。

1-2-2. 地域の住民，教育委員会が「住民の子育て同盟」を再度意識して確立する観点。

例えば，市や町や村の改変は，子供の交流と遊び，高齢者の「遊びと研修と交流」を入れたものに改良します。子供は「社会の宝」という観点，「地域の運命共同体意識」と「地域の利益共同体の意識」を持つことが求められています。住民代表，総代，民生児童委員，保護司，PTA，警察などの協力と支援が必要になっています。

「子育て」で一度失敗すれば，その修正に大変な労力があるばかりでなく，他の人の苦痛や労力が増えます。人が育つには「莫大な協力と苦労」がいるのです。

子供の健康を「心の養育という観点」で，村や町から「涙している子供」をなくすような「大人の同盟」が重要です。どの子もよりよく育つような「住民の子育て同盟」を意識して作ることが重要になりました。「子育て」には，地域住民の「ここからの同盟」が必要です。この同盟なしにすべての子どもの「健やかな成長はできない」のです。

1-2-3. 「学校風船論」の観点

今では，多くの住民，父母，祖父母，教師，教育委員会，相談所，関係機関の人々が，いいも悪いも「学校という風船」をふくらませて，20世紀を生活してきました。学校へはいろいろのものと金や力を注いできています。人々は，精一杯の汗と血と苦労と知恵を集めてきています。

月に1回，少なくとも「2月の内に1回」は，父母や住民は，時間を割いて短時間でも

「われらの学校」へ出かけて何かの「役に立つように動く」観点が重要になっています。

核家族や両親の共働き、単身赴任という子供にとっては、誠に良くない習慣が社会に増えたためです。この悪習慣が子どもの成長を弱めており「人間性」が育たず、ゆがめた形を与え、子供の健やかな成長を妨害しています。その傷は蓄積されて後年噴き出します。家族や地域の人を前に出します。出さないと、成長できないのです。

例えば、本読みをした親と「していない子供」とでは、魂に大きな豊かさの落差が出ています。夜寝る前の本読みや、親子の勉強、親子の絵本づくり、子供との料理、洗濯、動物の世話、野菜の世話、植木の剪定などの仕事を大人が教えないで手を抜けば、空白が子どもにできます。空白は、子どもの発達を遅らせます。未熟のままに置き去ります。この事態は社会的に不幸をよびおこします。

子供は「社会の宝」であると認識して、みんなで助け合うことです。これなしに、子供達にとっていい成長の条件はないのです。

子どもの環境は「親のそばにあり」「地域の中にある」のが普通の条件であり、ないのは危険な環境といえます。

大人が「子どもと共に孫と共に成長する意思と住民の同盟」ができれば、「みんなの学校」はふくらんできます。楽しくなります。今学校は「さみしいところ、つまらないところ、しかたなく行くところ、どうでもいいところと感じている人」が少なからずいるのです。これは逆説的な大人の対応です。

大人が学校を無視すれば、子供に学校の影が薄く写るのは当然です。子供も教師も社会変化の重圧で、「社会の宝学校」はしぼんでゆきます。世界がどんどん小さくなり、垣根がなくなって、生活様式が変わっていますから、「住民と学校」が知恵と力、汗と涙、笑いを集めて対応しないとその被害はすべて、21世紀を担って行く子供達に覆いかぶさってきます。

「子供がゆがめば社会は疲弊」します。子育ても弱くなり衰えます。この反動的な現象が現在目につきます。あらゆるところで「大人の手抜き」が「子供達と高齢者」に不利益という形で圧迫しています。誰かが自己中心的に自己のみの利益を守るために他人を傷付けています。周囲の人に「援助を放棄」して控えているならば、無意識の内にも学校への力は抜けます。

そうすれば、地域の「学校の力」は弱くなります。地域の結束が弱くなれば、全体として、学校の力は弱くなり、子供への愛情が、家庭の中でも、地域の中でも、学校の中でも「愛」の質は悪くなり、量も減ります。

目にあまる「子供の放任」や「子供への過保護」は、こうして習慣として「世代ごとに加速」して増加してきました。

インターネットが良くなり「情報」が増えれば、それを使う人の人間性や人類の共通意識が必要になります。破壊的な悪の利用ではなくて、善用をする態度が必要です。人間性の高揚には学校がまだまだ必要な機能を多く持っています。

人類の連帯がいよいよ本格的に21世紀に始まります。学校は子供だけが行くところではなくなります。「6歳から死ぬまで通うところ」になるのです。

「人間の発達場所」にもなりつつあります。すべての人が学び合い、育ち合う場所として、「居場所としてのガッコウ」の役割は変化発展をしてきています。「生涯学習社会」の到来です。

「学校の役割」はだんだんと変わり、学校の必要性は「地域の人」にとって増えています。国家が変わっても学校はまだ重要で、いろいろな年齢の住民が出入りする学校に発展すべきことです。その速度を早めることがS・Cの仕事になっています。

1-2-4. 「子育て、親育ち情報と責任を誰もが共有する時代」という観点

「学校を地域の焦点」として、住民が「意識を学校へ集中する時」を迎えているのです。学校と地域の改善はここを焦点にして人が集中することから始まります。

経済的に、心理的に疲弊した村や町を、再度構築するには、「情報と責任を誰もが共有する」ことしか克服する方法は有りません。どの子供にも「情報と責任」を感じる住民になることが、新しい世紀の住民の生き方になります。

「情報の共有」は、「責任の共有」であり「労力の共有」になります。またそうなれば、それだけ、内容はニーズにあったものになります。特定の人だけの力だけではすべての子どもの「子育て」はうまくできません。子供の不満が増えるばかりです。今まさにすべての大人の「子供と高齢者への人間愛」がとわれています。

1-2-5. どの子供にも、「子供の居場所」がある「村や町」という観点

子どもや大人に「こころの真空地帯」が生まれないように、村や町、学校を改変してもらうことです。公園や田んぼや畑や山や川、海の自然を復活したり、商店や工場や牧場を学校と連携します。また、緑の回廊を意識して確保します。町並みを保存します。

特に地域住民・教育委員会とは日常的に連携し、子供を軸に、子供の遊びや学習や勤労での支援関係を強めます。この中で子どもはひとりで居場所を見つけるものです。

泥んこ遊びや牧場での牛馬とのふれあい、食事や清掃の世話を通して、命の貴さを体験の中で知ります。そこに居場所を子供が「発見できる」ようにします。子供を連れだします。

現在、子供が「家と学校に閉じ込め」られています。子供を広い世界に「連れ出す」ことが大人の仕事と責任、義務となります。子供は広域の地域の中に必ず居場所を見つけるものです。子供の活躍する場面は幾つありますか。

大人たちの「居場所」が地域に「いくつ」ありますか。

子供の居場所は「大人の地域での居場所」とからんでいます。子供の居場所も、親たちの「居場所」も、「高齢者の居場所」も、地域にはいくつもあることが重要です。

「みんなの居場所」を地域にも意識して作ることです。それには、住民が集まる場所を作

ります。違った年齢の人が交流して共通の作業をすることです。「学校にその機能を加えること」です。「ボランティア」と専門家との結合です。各人が地域の中で存在を示せる場面と舞台の提供がもとめられます。

お金がないなら工夫が重要です。先立つものは、お金よりも「人の集まり」です。

1－3．複数の校外の「カウンセリング」の活用は、成長促進になるという観点

1－3－1．公的私的な居場所、「相談所5つ以上」に出向く観点をもつ。

5つ以上の「機関や相談所、クリニックや病院」に出かけます。いろいろのニーズにこたえるために、5か所以上に出て行かないと適当な人にめぐり合わないのが実情です。これは他の問題でも病院でも同じです。

例えば、おなか痛い場合、足が痛い場合、二つの処理が言われています。1つは「すぐ切れ」という考えです。2つはその逆の考えで「切ることはない」というものです。

このように実際の場面ではいろいろ相反する説が出るのです。どの意見が最もいいかは速断できないのです。

基本的には親と子どもの選択ですが、「最も良いと感じる選択」をするようにS・Cは努力したいのです。一度でぴったりな人や場所、カウンセラー、医者は、見つけにくいのです。

ですから5か所以上のところを紹介して、足で歩いて満足できるところを捜してもらう事が重要になります。歩いているうちに解決する場合も出ています。

親や本人が、肌で「ここが良さそう」と感じたところが、いいといえます。安心できる人のところがいいのです。子供や親も多様ですし、いろいろの人に対応できる専門家も多様なのですから、ちょうどいい関係を見つけるのは相当の「足と時間」がかかるのです。またこうしないと納得できる人に会えません。多くの人に会えば知恵をさずかります。

1－3－2．世界が小さくなり変化の速度が速くなっていますから、いろいろの対応が必要になります。

カウンセラーの資質も多様になり質の高度化が求められて来ています。実際には、いろ色のカウンセラーがいますから、広く構えて、適切な対応をしてくれる人を捜すことが極めて重要です。世界が小さくなれば情報が多くなります。この「もとめて歩く」過程の中で、自分が納得できるところや人を捜しだせるのです。

現代は、個人的にも相手との「衝突」が激増します。個人の感情は周囲の行動にかき乱されます。個人は混乱しやすくなります。情報の中には相手の人権を尊重しない情報があります。闘争です。反逆です。仕返しです。

世界が小さくなり人口が激増すれば「2重の環境の悪化」があります。ですからいろいろのケアや支援が必要になります。現在は、今までの蓄積された「こころの傷」が噴き出している状態にあります。思春期はそうですし、子から親になる時も心の傷は吹き出します。

人は子供を見て我に返ります。「赤ちゃん返り」をします。

人生には、何度となくこの吹き出す場面があります。そうして身軽になって成長し発達するのです。

1-4. 「ボランティア」を公募する観点

1-4-1. 多くの若者、高齢者、保護者の「ボランティア」を公募し支援者を集める観点 大学生から、保護者、高齢者、達人たちに集まってもらいます。

その中から適任者を選び、協力を依頼し委嘱をします。適任者には、支援行動を要請して、「こころの教育支援」を、遊びや行事、祭りや研修、旅行や冒険を通して、感受性を鍛え忍耐力を強化します。こうして視野を拡大します。成功体験や挫折体験をします。

1-4-2. ボランティアの名称

学校ボランティアは学校が募集するものです。仕事はいくらでもあります。

P T A ボランティアはP T Aが募集するものです。P T Aの活動を本来の目的や主旨に合うように、活動するものです。P T Aの機能を強めることになります。

住民ボランティアは地域にある問題のために努力をするものです。学生ボランティアは子供の支援や高齢者の支援をするものです。

1-5. 「地域の子、孫は地域で育てる」観点

1-5-1. 「地域の子や孫を地域で責任もって育てよう」を合言葉で、相互の支援組織を作り行動します。

地域の中には、かつて子育てをした人や、現在孫育てをしている人が大勢います。今ここで、この人たちが集まり「子育て孫育てのノウハウ」の交流と研修が必要です。

「親育ち」と祖父母の研修です。よい「ノウハウ」を広げて子育て、孫育ての適正な心構えを会得してもらい、子供や孫がすくすくと育つように「家族と地域と学校の環境」を、住民参加で整えることが今必要だからです。

冷静な目で相互に検討を加えて改善する時です。そうでないと、子供達の「叫びや悲鳴」を無駄にしてしまいます。放置すれば大きな傷となり、蓄積されてゆきます。

現代は、すでに述べたように「親子の絆」が細りつつあり、その結果として性格がねじれた子が育てば社会の損失になります。子供は次の時代の建設者です。健全な「子育て孫育ち」が求められています。「地域の子、孫は地域で育てる」観点が不可欠になっています。

「子供の減少と高齢者の増加」と、さらには「生活環境の悪化」という厳しい条件が強まり、個人の工夫ではどうにも解決ができません。この解決には山を動かすような大きな学力と知恵がいるのです。その知恵の結集には「地域の責任者と支援者」がいるのです。今までの私たちはこの「結集」の努力をしていません。分散している人材資源を集めたいのです。

仕事も多くなり、海外からの人たちも増えて「新しい枠組」での住民の連帯行動が欠かせないのです。「人の子も自分の子も、みんな私たちの子供」という観点が重要になりました。人を一人育てるには相当大きな労力がいるのです。今までは「地域の蓄え」でなんとかつないできましたが、現在は「地域の破壊」が大きくて、「意識的な取組み」なしには子供も孫もうまく育ちません。そのような社会の様相があります。個人の力を越えた「地域のみんなの力」が必要です。

例えば野口英世の場合も「金銭的、精神的、心理的支え」が地域の人々からなされています。

地域の期待が大きいと「子育て」もうまくゆきます。地域の存在が大きな教育力ですから。ただ機能が現在は弱っています。「地域疲労」もあります。若い人材が町に出て頭脳の流出があるのです。これを補う工夫が必要です。「都市から村へ」の協力と支援活動です。

1-5-2. 地域の人々の結集を支援するため、その人材の補強のために、他地域からの「広域人材派遣支援」がぜひ必要です。

地域の人たちと他地域の人たちとの連携で、子供と孫の成長を支援する「広域地域の支援プロジェクト」を作ることです。それには村や町の場合は近くの大学のある市町村の協力が必要です。

大学生の協力は、大学の教授たちの理解と協力で学生の協力を得ますし、大学構内に「募集ポスターの掲示」を依頼します。10人程度の大学生は、協力してくれましょう。

1-5-3. 学校ボランティア、PTAボランティア、住民ボランティア、学生ボランティアは、PTAや教育委員会、校長が協力して募集し委嘱して進めれば狭い地域でもできます。大学生や大学院生の協力を得て、そして親、教師、住民、専門家などいろいろの方の協力を得て「ボランティア」としての活動を依頼できます。

子育ての活性化は「専門家の育成とボランティアの導入」に期待が持てます。その人材の活用が「新しい効果」を作ります。

ボランティアは、社会的な柔軟な機動力で必要な人材を結集できるのです。なくてはならない存在となっています。

2. 三者（学校代表、市町村教育委員会代表、スクールカウンセラー）協議の観点

2-1. 地域全体を結束する観点

地域の中心には、教育委員会を呼びかけ人として、地区総代、学校、PTA、相談所クリニック、関係の機関、民生委員、保護司、警察などがあり、この人たちの結束する方向へS・Cは努力をします。手紙や電話や連絡会の方法で意志の交流をします。

どの地域にも中心になって人を集める人がいましょう。その人を中心にして多くの人を集

めるのです。バラバラになりやすい地域を「結束の方向」へを努力するのです。

2-2. 学校区域の住民の子育て意識の高揚、及び支援行動の結束には、学校代表、教育委員会代表とS・Cの三者の「同一方向への結束」が重要です。

S・Cの相談活動が成功裏にすすむには、この三者での「安心した連携」が重要です。それには定期的な、学期に1回程度の協議が必要です。また、S・Cが学校と教育委員会の間に入ることは、こどもや親の悩み、教師の「苦悩に答えやすくする機能」が生まれます。円滑な関係が子供、親、教師の間に生まれています。大きな成果でしょう。しかしながらこれですべてはうまく行きません。もっと基本的な支援が必要です。

2-2-1. 子供達の「村の子育て孫育て」として支援協力を呼びかける観点

「村の子育て孫育て」の土台は、村人の協力関係の強さ、暖かさにかかります。

例えば具体的には、「子供を守る家」・「安心の家」を基礎にした「地域の連携、協議の場づくり」です。

黄色の看板に「子供を守る家」と書いて家や塀のところに貼ります。子供を守る宣言をするのです。これで、地域の結束が目に見えます。

この札は、大勢の人の目に入ります。子供も安心できるし、大人も安心します。子供をねらう大人や若者も考えます。もちろん長期になれば変化工夫が大事です。今後更に工夫を重ねて改良も大事です。「村の子育て孫育て」はきっとみんなが待ち望んだことなのです。

「子供は財産、社会の宝」という機運が新しい装いで生まれつつあります。環境と老人介護の課題解決には、若い人の光と熱、知恵と創造と連帯の努力が必要になりました。

2-2-2. 「よその子供や孫と話たり、一緒に仕事をする」観点

この体験を通してどの子とも、どの孫とも気楽に話せるようになり、仕事もしやすくなり、自分の子や孫とも「肯定的」につき合いができるようになります。「自分の子がよければ」という感じではこれからの世間は渡れません。寿命が延びればいずれは、若い者に、近くの人に迷惑をかけるのですから。「三世代の人の支援と協力」が各人の「生きる力、生きる知恵」を生むことになります。

「人の子も自分の孫」ももうありません。みんな私たちの「共通の子供であり孫」です。介護社会ができてきてこの点はますます重い意味をもってきました。

「家制度のバリアーが低く」なります。「自分さえよければ」という狭い考えでは子育てでも、親育ちでも、老人介護でも、どうにもやって行けない社会に入ったのです。

「私もあなたも一緒に」という観点が、人の生きる行き方になり、世界的な現象になりました。地域は本当の意味で「家の連合」になるのです。新しい父性、母性の形が必要になりました。

2-2-3. 「子供を守る家」・「安心の家」の協議の場の観点

鈴鹿市では、子供を痴漢・誘拐・いじめ・暴力から守るために、通学路や公園、道路の角や人けの少ないところの住民の協力を得て、幅8cm、長さ40cm程度の板や、丸いシールに「子供を守る家」とか「安全の家」とか書いてはったり、ぶら下げて、痴漢やいたずらを予防し、危険があれば家に入りかくまってもらっています。1997年からです。子供の被害が増えていますからこの方策は有効で、急速に各地で広がり大きな効果が出ています。

2-2-4. 「住民自身が自分たちで子供を守る」観点

これで、子、親、孫の三世代の結束が動き始めますし、住民の結束の意識が強まります。このような具体的な目に見える三世代の結束は「家族会議と地域協議会」の討議でますます強化されてゆきます。「住民の合意」が強まります。

「家族会議」は家族の結束の上でなくてはならない対話になります。「地域協議会」は家族の壁を越えた「バリアフリー」の交流と結束を生み出す上で、なくてはならない「会議」になります。

「地域の子は、地域の手で」という合言葉と行動は子供の意識と親の意識を変えるでしょう。誰かへのお任せではなく、各人が「貢献する」姿勢と労力の提供が重要です。

3. 「3世代の子育て、孫育て方式」が、町や村に根付く観点

3-1. S・Cは、ある場合には「村や町、地区、校区の協議会」に出かけます。

この三世代の「心の交流サイクル」を生かし強めます。地域はまた「家庭と学校をつなぐ絆」にして人がいったり来たりします。

例えば、ゴミ問題、牧場の課題、大気汚染、水質汚濁、土壌の汚染、昆虫の愛護などです。また本読みや、踊りや農作の仕事などなんでもあります。

みんなで「世間を広くする行動」が必要です。社会を明るくする人を育てることです。

社会を暗くする人が増えつつあります。大人の工夫が急がれます。

家庭の崩壊、地域の崩壊、学校の崩壊、そして「人間性の崩壊」が大人と子どもに目立って来ました。自分がうまく行かないと「誰でも良いから殺害する」という考え方です。どんな相手でも殺害すれば満足という残酷なしうちです。無差別の「仕返し」です。

この現象が続けば、さらに「人間性の崩壊」は拡大されて崩壊が崩壊を誘発します。食い止める方法は「地域の子育て協議会」で、共通した支援行動を地域で起こす外に方法はありません。「待ったなし」の責任ある行動をこの現象は呼びかけています。

子供が「人間性豊かな子供」に育つように大人が共同することが原点です。学校への支援行動もこの「地域の住民の共感と支援」で効果ができます。若い親たちが子育てに手間取っているのです。親たちに「住民の援助」が必要です。

3-2. 地域広報の活用の観点

「地域住民」の結束を強めるには、情報の提供が重要になります。「市町村の広報」が結束の情報を与えることに重要です。私は、「子育て、孫育ち、親育ち」を主題として毎月連載をしています。

勢和村広報でのPR・情報を交流し協力し合って、「子育て、孫育ち、親育ち」をするように呼びかけています。

3-2-1. 市町村の広報で「子育て、孫育ち、親育ち」と題して連載します。

子育て、孫育てを成功させるには、それなりの時代に合った「親育ち」が求められています。また「教師育ち」の実際をみんなで具体的に話すことです。

これは一方向ではありません。二方向が大切です。地域の人と現職の親と教師との腹藏のない討議が重要です。

「自分の子他人の子」という見方ではなくて、「私たちの子」という観点が非常に重要です。親だけでは子供は育たないのです。周囲の人、地域の人、大学生や大学院生の知恵と力が必要です。

地域の支援と地域を越えた人の支援は子供の栄養剤であり、大人の生きがいになるのです。それなのに、目を閉じて見ていない、喜んでいない人が多いのです。

「親切は与えて減るものでなく、与えると増えるもの」なのです。自分の子をよく育つようにと思うなら、周囲の子供、学校の子供をよくするように努力をしなければうまく行きません。

世間の温かな手助けが重要です。一人の子供を育てるには2人の親が基本ですが、「養育力のある人」が親のほかに6-8人はいるのでしょうか。それほど、育ちにくくなりました。子供の魂のフォローは簡単ではないのです。「魂の交流」が不足しています。この不足を補う人が重要なのです。

校長先生の役割も大きくなりました。校長先生は親たちを子供の頃には教えているからです。顔見知りの教師の役割も重要です。

思春期の子供に十分な範囲の広い体験、世界を見させて、触れさせて行かねばなりません。広い世界は必ず「子供の魂」をうごかします。「魂を感じる時間と場所」を大人は与えるべきです。子供は「大人の魂」を受け継いで育つのです。

大人の魂が小さいなら子供はうまく育ちません。山のような、海のような大きくて深い「魂」を大人はもつためにも「集まる」のです。集まれば大きな魂が生まれます。

3-2-2. 住民との「読者の交流会」を持つ観点

「大きな魂」をもつには読者との交流が重要です。読者の声が新しい発展の方向を見つける力になるからです。「親育ちの交流の場」が広がれば親の成長は確実に進むでしょう。実

際の体験が各人から出されて、交流の中で自然に今後の方向を具体的にみつけだすでしょう。切れ切れにされている「大人の魂」を繋ぎます。これから、子も親も祖父母も心が成長することが要請されるのです。

子育て、親育ちも2方向の情報が重要になります。お互いに「ノウハウ」を出し合うことで、一層子供や孫にいい作用をするでしょう。親も、祖父母も、大人は一体になり、子供や孫に「支援者」として適切に対応することが重要です。読者の交流の中で本当の「ノウハウ」を獲得することができます。

相反するノウハウがより適切な支援方法を生み出します。具体的な支援方法を明確にすることが重要で、共通な感覚を持つことが大切です。この集団ができれば大人の支援が具体的に進むことになります。この中で大人自身もそれなりに成長し発達してゆきます。常に発達をひとは続けます。「地域の支援」があってこそ子供も大人も成長できるのです。

3-2-3. 「子育て住民ボランティア」を「公募」する観点

「子育て、孫育てのボランティアの会」を作ります。いろいろの交流でノウハウを出し合います。それを試みて自信をつけるのです。大人から子供への貴重な贈り物になります。子供が具合よく育つには親のほかに、祖父、祖母、親戚、知人、達人、専門家などのいろいろの青年や、大人、高齢者の支援が大切です。

「ボランティア」という形で「住民が集まる」ことです。住民が集まる出会いに応じてんだんと現実の問題への理解が深まります。交流の中で共感が出始めます。共感が住民の間に広がれば、「子育て、孫育て、親育ち」の「情報が共有」できます。

「子育てボランティア」は主旨の理解がある人ならばボランティアになれます。市町村で、募集します。まず5人程度から増やして行くのがいいでしょう。20人も集まれば7人程度で徹底した討議をします。それを全体にかけて大枠を決めます。

少なくとも5つ以上の「選択できるオプション」を持つことが支援を受ける人には必要であり、重要です。

1つの選択肢ではよくありません。ある「正」の方法のほかに、その反対の「逆」の方法もあり、その中間の方法、あるいは、斜めの見方の方法も必要です。実態はいろいろとあり多様です。予想を超えた状況にも対応できる体制を持つことです。

4. 地域住民、教育委員会と「スクールカウンセラー」の連携強化の観点

4-1. 「地域の達人、地域の人材を結集する観点」

子供や親も、結局は「地域の人の生きざま」のなかで知恵と勇気を得て育ちます。地域の中には、大人にとっては平凡に見えていても、子供にとってはたくさんの「知恵と勇気と励まし」があるのです。地域の人たちが子供たちにもっと「意識して」話しかけたり、一緒に仕事したり、遊んだり、触れ合いを深めれば、地域の崩壊も、学校の崩壊も、家庭の

崩壊も減るのです。

人は、ある時受けた「心の傷」を、成人してから子供たちに「ぶっつける」ことをくり返します。無意識にします。本人は、仕返しはしていないといいますけれども。

しかし実際は弱い者へ「傷を吐き出す」ことで自分のコントロールをしています。それが家庭の中で、学校の中で、社会の中で「吐き出し」をします。意識していませんからなんでもします。だから「事件」は絶えません。毎日吐き出すのです。または特定の日に「吐き出す」のです。

こうして「傷」は長い間親から子供へ、子供から孫へと繰り返されます。この繰り返しを止めることはむづかしい。けれど、うける打撃を軽くはできます。「仕返し」を理解できる人が集まって「地域で対応すること」が重要になりました。この世代を越えた協力が人の成長を適切にします。親や祖父母のもっている傷からも吹き出しているのです。

4-2. 地域の人材を「結集」する方向

4-2-1. 「子供を守る家」

これは「札」です。縦が40cm、横が8cm、厚さは2mm程で、黄色い色をしています。遠くからでもよく見えるようにしてあり、薄暗い時でもよく見えることが重要です。

市町村の商店、道の曲がり角、人の少ないところの家、この札が有ればいざという時には「駆け込寺」として、駆け込んで助けをもとめます。その札の家は誰か人がいる家ですから、安心して突然でも入れます。お互いにとっさの行動ができる家になります。こころ強いものです。このような「安心」の出きる家が地域には沢山必要です。

沢山の札がかけられた家が見えればいたずら、痴漢や誘拐が減ります。現に事件は減少しています。

この札で「地域の意識」は子供に集中してきます。子供も「地域の気持ち」を感じとります。札が有る家が見える時地域の人の温かな感情が見えてきます。この地区の人の人間性が感じられます。子供は「私たちのかけがいのない子供」という宣言にみえます。殺風景な町や村を変える1つの知恵です。村や町に黄色の札が多く見えるのはたのしい思いです。有りがたい思いです。

「子育て孫育ち、親育ち連合」という気持ちが出ます。「開かれた学校」という感じが出ます。地域の方の「ボランティア」がここにはあります。

商店、企業、総代、児童民生委員、保護司、補導委員、自治会役員、辻の家などが「ボランティア」として努力をしてくれているのです。心を形に表現してゆくのです。

4-2-2. 大学生、大学院生の支援を得る観点

教育委員会が、募集して学生に依頼します。専門は問いません。心理面も、健康面も、体の面も、魂の面も、冒険や勇気の面も、性格の面も、思春期の子供は悩みがあります。この

相談できにくい問題も学生であれば聞いてみたくなります。話してみたくになります。

親戚に若者がいても年が大きい過ぎたり、遠くに住んでいたりで、今という時も思うようにゆかない現状があります。この点で「遠くに住む親戚より近くの他人」です。

青年は、子供にとっても大人にとっても貴重な存在です。宝です。資源です。若い人を身近に感ずることが、子や親、教師を100倍勇気づけるのです。

5. 各種相談所、諸関係機関との「協力体制と連携強化」の観点

子供の心身の健康は、各機関の協力で達成できるという観点

5-1. 公立、民間の各種相談所、諸関係機関と日常的に活発に連携して協力を得ます。

少なくとも相談所は、カウンセラー、クリニック、医師、児童相談所、病院の中から5か所以上、それに警察などの関係機関も3か所以上、合計8か所以上を用意します。このようなバックアップする人たちや機関がないと、S・Cは適切な対応を「子供や親、教師」にできないからです。

子供や親の苦情、悩みや訴えに対して専門家といえども、具体的に安心できる適切な助言や支援はいつも100%できてはいないのです。ですから子供や親、教師の悩みはことのほか大きく深く苦しい思いでいます。

この「8か所めぐり」という方法は私の経験から出ています。5-8か所の先生が見れば、ある程度真実に近い見解を「依頼者」はもらえるのです。3-4人では専門家の見解が互いに逆になり困りますが、5人との面接を超えて行けば、どの意見が考えられる適切な対応策であるのかという点ではほぼ検討がつき始めましょう。

5人の専門家に会えば、2-3つほどの意見がクローズアップされてきて、心の整理に役立ちます。

親と子ども、教師は5-8か所からの相談所の意見と関係機関の意見、助言をもらうなら、それにつれて、自分でも自分なりに何らかの「理解」が深くなります。事態の把握が少しでも出来るようになります。

あちこちと歩いて考え、意見を聞いているうちに、親自体、子供自身の感覚が働いてきて、何らかの自己認識の修正が始ります。生活の「習慣の修正」や、何らかの「決断」ができる様になります。

自分でものが考えられずに困り切っていたのが、5か所めの訪問のころにはある考えが持てるようになります。また「気持ちに余裕」ができます。ある「明確な考え」がわきだします。するとそれなりの自信が出てきます。ある明るい心境が得られるのです。こうなれば、「苦痛からの解放」や「課題との付き合い」が少しでもできるようになります。このような状況がありますから、S・Cは日ごろから相談所と関係機関には、連携して即時に対応ができるようにしておくことが大切です。

相談所や関係機関を8か所以上もつなら不安なしに相談に乗ってもらえます。この体験が

自己概念の修正や人間関係の修正，表現方法の修正になります。悩みの中にあっても何かの明るい方向に気づくのです。これで1つの安心がえられます。

5－2．相談できるところも，所によりいろいろの特徴をもつという観点

どこの相談所が，その子と親に「最もフィット」するかが問題になります。この問題は最終的には「本人と保護者」が決める問題です。そのために私たちは多くの公立私立の相談所の情報を用意して「リスト」を渡します。

子供や親が選択し可能な相談所へ全部行きます。どこかには「いいところ」また「ちょうど良いところ」といふようなところがあるからです。

足で歩いて捜す中でなにがしかの確かな発見があるからです。「足で歩いて，目で見，耳で聞いて」専門家と触れ合い，その意見を味わいながら「自分自身の体」と相談します。この方法が最も「心に落ち着くやり方」です。歩くことで，訪問することで「安らかな気持ち」がでできます。過度の競争社会で育児でのノイローゼが強まり，子育てができない父母が激増をしています。自分も精一杯ですから，子供まで気持ちが回らず，父親の工夫も不足がちです。

5－3．諸関係機関もいろいろと特色があり，子供に一番いいところを提供する観点

警察などの機関とは，事前に連絡を持っていることが必要です。近くにない場合があります。困ります。たくさんなくともそれでも，関係機関も3か所以上は用意しておきます。最低3つあれば，相談所と合わせて8つになり，何かの感覚が得られます。1－2か所の機関では何か言われても，何が今問われてきたのかさえ不明の状態にあるのが実際ですが，やがては少しずつ，言われたことが当人に理解でき始めるのです。そのようなプロセスが現実にかかるのです。冷静な状況認識もすすみ対応の方法にも変化がでます。

5－4．これらの相談所，各機関との「協力支援のサイクル」を生かし強める観点

「情報を共有」すれば新しい事態にも対応が早くできます。心の問題は生命にかかわりますので，ゆっくりでは早期発見早期対応ができません。

「5つの相談所，3つの関係機関」との連携が生れてくれば対応が進みます。互いのコンタクトは容易に取れるでしょう。やはり「顔と顔」「フェイス to フェイス」の協力が重要になります。心や感情の問題は人により微妙に変化しており，「直接のコミュニケーション」がもてるような状況が重要です。毎年増えてくる色いろの相談所，各機関との協力も迅速に進むような対策が日ごろから重要です。電話での相談も大切な方法です。

5－5．四者（学校代表，教育委員会代表，県教委関係者とS・C）の連携と広域の人材協力を強化する観点

5-5-1. 大学生が少ない町村などの地域では、直接、大学の協力を得る観点

近くで大学生の支援を得ることがむづかしい場合は、遠くても大学の協力を得ます。男女の学生各5人は欲しいのです。学生が少ないとこの制度の有効性が半減します。選択ができる人数は最低で「男女学生各5人」です。

子供と親、教師、学生のお互いが、スムーズに選択できるようにするには、サポートする人は男女5人はいてほしいものです。現在は、大学生が増え、子供と接したり高齢者と接する学生が増えています。ですから困難はあっても、工夫して得られる人数です。

近所に大学があってもなくても、広く大学生のボランティア参加を呼びかけます。初年度は5人でも、毎年募集すれば10人は超えるでしょう。やはり「数は力なり」です。若い大学生や大学院生が10人以上集まれば、子供にとっても親にとっても、地域の人にとっても、大きな励ましになるのです。青年自体が「大きな力、子育ての力」なのです。

5-5-2. 県内の大学がある都市部の連帯の協力を得る観点

不登校の子供や親の支援のために、広域の地域から人材の派遣などの協力を

メンタルフレンド、ヤングアドバイザー、ドリームフレンドなどの青年の支援者は子供にとっては「兄や姉」のような大きな存在です。青年の知恵と力、態度と人柄がモデルとなり「強い英知と魂」を子どもに伝えるのです。これは非常に重要なふれあいです。

そのバイタリティー、エネルギーが重要です。子供も大人も「人の声を聞いて、人の体にふれて、人の目を見て育つ」のです。若い学生とのふれあいは人間成長のはげましです。

5-5-3. 状況の把握を迅速にするために「県単位かその次の単位」の広域の関係者の会議が年間3回（春、秋、冬）は必要。

この「広い地域の会議」なしには大きな効果が出ない感じがします。社会傾向は「都市部から郡部へ」と流れて行きますので大きな都市部の情報が重要です。

「予防」に力を入れてこそ、「子育て」や「親育ち」の効果があります。「火事は始め5分」といいますが、子供の成長にも「タイミング」があります。適宜に適切なそして迅速な「地域の大人の対応」が子供の危機を救います。親の崩壊をふせぎます。予防は重要です。それには「情報の共有」です。

広域の会議はこの効果を持っています。年間3回の会議は、例えば5月、9月、2月と必要な時期になります。

おわりに

スクールカウンセラーは、地域住民、教育委員会、PTA、相談所関係機関と子ども、教師を結びつける役割がありますから、現職教員が大学院へ通い、又は研修に出かけて経験をつみ、カウンセラーの資格をとり、スクールカウンセラーとして役立つように道を開かれるよう願っ

ています。教師の中の0.1%の人がカウンセラーの資格をとり、実力をつけて下さるように希望しています。現職教師の奮起と教育委員会の暖かい配慮を切に願っています。

参考文献

参考文献

- 1) 下村哲夫(1997): 学校の条件. P283. 学陽書房
- 2) 村山正治・山本和郎(1995): スクールカウンセラー. P278. ミネルヴァ書房
- 3) 寺内義和(1996): 大きな学力. P445. 旬報社
- 4) 山住正己, 堀尾輝久(1976): 教育理念. P463. 東京大学出版会
- 5) エドワード・ホフマン著, 上田吉一訳(1995): 真実の人間. P450. 誠信書房
- 6) 福井健一(1985): 教育への直言. P246. パンリサーチインスティテュート
- 7) 妙木浩之(1997): 父親崩壊. P254. 新書館
- 8) 村井実(1996): 人間の権利. P285. 講談社
- 9) 河合隼雄(1996): 人生学事始め. P230. 講談社
- 10) 富田和己(1988): 子供達のS O S. P250. 法政出版
- 11) 住井すえ, 福田雅子(1989): 水平社宣言をよむ. P233. 解放出版
- 12) 中里良二(1969): ルソー. P222. 清水書院
- 13) 中田悌夫, 栗屋かよ子(1986): 自然と人間復権の教育. P268. 一光社
- 14) 中田悌夫(1990): カウンセラーへの道. P252. 一光社
- 15) 中田悌夫(1993): グローバルコミュニケーション. P173. 一光社

資 料(親)

神奈川新聞, 朝刊, 1999.4.25(日) 非行に自信がない親
朝日新聞, 東京朝刊, 1999.2.11(木) 親もあいさつせず
西日本新聞, 朝刊, 1999.2.05(金) 親に無関心, 不参加
上毛新聞, 朝刊, 1998.7.15(木) ピアカウンセリングを仲間で
福井新聞, 朝刊, 1999.3.12(金) もっと愛情を親も教師も

資 料(教師)

朝日新聞, 東京朝刊, 1998.11.15(金) 学級崩壊
東奥日報, 朝刊, 1998.12.30(木) 毎日が師走
大分合同新聞, 夕刊, 1999.03.09(火) 教師への暴力
朝日新聞, 岡山朝刊, 1999.02.21(日) 教師への暴力
毎日新聞, 東京朝刊, 1999.04.07(木) 担任をやめたい31%
熊本日々新聞, 朝刊, 1999.02.04(木) 燃えつき症候群
宮崎日々新聞, 朝刊, 1999.02.24(火) 疲れてやめたい教師
読売新聞, 朝刊, 1999.04.07(木) 3人の1人はやめたい教師

朝日新聞、東京朝刊、1999.04.08(木) 一人で悩まないで

西日本新聞、朝刊、1999.01.08(金) 教師の自信喪失

資 料（地域）

四国新聞、朝刊、1999.05.03(月) 少年サポートセンター

神戸新聞、朝刊、1999.02.12(金) 地域の特性

神戸新聞、朝刊、1999.02.18(木) トライやるウィーク校外体験

神戸新聞、朝刊、1999.02.19(金) トライやるウィーク鳥取と高知に

産経新聞、大阪、夕刊、1998.12.24(木) タフな子供を

高知新聞、朝刊、1998.10.18(日) スクールマザーで壁をなくす

東京新聞、朝刊、1998.03.21(日) ピアサポート

高知新聞、朝刊、1999.03.30(火) 不登校生徒にパソコン電子メール

東京新聞、朝刊、1999.03.30(火) 生徒のストレスがいじめに

朝日新聞、東京朝刊、1999.02.25(木) 警察も子供と運動会をする

朝日新聞、大阪朝刊、1999.03.29(月) 地域と連携を

日本経済新聞、夕刊、1999.02.05(金) 国を挙げて取り組む

北海道新聞、朝刊、1998.07.24(金) サマースクール

神戸新聞、朝刊、1998.08.07(金) 地域とふれ合えたよ

読売新聞、大阪夕刊、1998.08.31(月) 生徒親、地域の力を学校へ

朝日新聞、福岡朝刊、1998.09.08(火) 町内に教育会議が中学が荒れて

以上